

名産“日高節”―カツオ節を造っていた話

浦河の漁業史を読むと、昭和の初め頃までは、ずいぶん暖流系の魚が獲れていたことに驚かされる。マグロ、ブリ、サバ、カツオなどで、黒潮の一端が浦河の沿岸近くに寄っていた。昔は浜からマグロが沖を遊泳するのが見えたというし、戦後も三十年頃までは南防波堤の先で交鮪（こうまぐろ）が弾ねていたほどである。

今でも基本的には変わりはないのだが、冬の盛漁期を除けば五月から八月一杯までは漁の閑散期で、浜ではこの時期の漁を“裏作”という言い方をする。明治中頃、この裏作の一つにカツオ漁があった。古い漁師が父や祖父から聞いた話として、明治二十年代にはすでにカツオを獲っていたし、カツオ節を造っていた。

時代は少し前後するかも知れないが、町内の昌平川、鱗別（うろこべつ）川、乳呑（ちのみ）川の河畔に一、二軒ずつ、桂、草野、平井などという名のカツオ節製造業者が年寄たちに記憶されている。このほかにも、現在の昇月旅館の所では西川儀三郎が、郵便局の西隣りでは荒川吉太郎がカツオ節造りを手がけていた。また井寒台でも永平巳之助がこれに従事していたという。おおかたは本州から来た人びとで、加工場の前を流れる川で、女たちが煮立てたカツオを冷やしたり、洗ったりしていた。大きい所では三十人からの女たちが立ち働いていたのを、館 勝五郎や高島末治郎、塚田正吉などが見ている。

これらの人びとがカツオ節製造に手を染めるようになったのも、夏場の閑散期に取り組める仕事だったからで、デメン（雇人）を遊ばせないために始めた程度のものであった。したがって品質もそれほど良い物ではなく、函館の海産物問屋にしる海産物取引所にしる、評判は今ひとつで、技術的にはまだ未熟な段階にあった。この頃の水準を示す資料に、明治三十六年、日高実業協会主催の“第一回日高水産工業品評会”がある。この出品目録の中にカツオ節、出品者として西川儀三郎、田中仙次郎の名が出てくるが、その講評は形姿、色味、香味とも商品としてもいまだしの感がある、というものであった。

ただ当時の浦河（現日高）支庁長西 忠義などの積極的な肩入れがあって、浦河に水産講習所が開かれ、その教師として静岡のカツオ節製造業者村松善八などが招かれて、技術指導を行っている。こうした努力を積み重ねることで、その評価は次第に高くなっていくのだが、その一方でカツオの漁獲そのものが次第に減り始めていた。

明治三十八年、大石安太郎が千葉県漁師を雇ってきてカツオの一本釣りを始めたのも、良いカツオ節を造るための良い原料の供給、という面だけではなく、薄漁を打開するための技術導入という側面もあった。この時期に、すでにカツオの代替品としてサメ、サバなどが使われ、サメ節、サバ節などが造られているのはそのせいである。カツオ節造りの技術を他に転用できるようになっていたことは、技術水準がかなりのレベルにまで達していたことの証明で、たぶんこの頃から明治四十年代、大正の初めくらいまでがカツオ節造りの全盛であった。

大正二年か三年、館 勝五郎は、高津弥三吉が雇った弁財型のカツオ一本釣り漁船に乗り込んで、一本釣りを学んでいる。小さなバケツくらいもあるシャモジで生の丸イワシを海面に撒くのだが、船

内に落ちたり、固まって海面に落ちたりで、なかなか上手くゆかなかった。「アンコ、アンコ、もすこし上手にまかねばダメだ!」と、叱られたものだという。このことを考えると、まだ漁は期待できる程度にはあったので、勝五郎たちも技術習得に積極的だったのであろう。

中村要蔵は、サケマス流し網の試験操業中の大正八年に、この流し網で思わぬカツオの大漁をしたという。また阿部金蔵は六年生だった大正九年、父要吉が延縄（はえなわ）で七百本のカツオをあげた。その陸上げを手伝った覚えがあるという。大正十四年、五年、塚田勘太郎は百数十本のカツオをあげたが、このとき以来絶えてカツオのまとまった漁はなかった。

三枚おろし、煮熟、放熱、洗浄、冷却、整形、乾燥、あんじょう、かび付けなどといった複雑な工程を要するカツオ節造りは、いかに高級商品とはいえ手間ばかり食う仕事で、漁が見込めなければ手の出しにくい仕事だった。

浜町にあった荒川吉太郎の加工場を買い取った川島藤吉も、大正後半にはサメ節、サバ節しか造らなかったという。しかしこの川島カツオ節製造所も、大正十三年八月、当時“川島の火事”と呼ばれた大火（百四十八戸焼失）をひきおこし、ついに廃業してしまった。その後は、カツオ節の話など人びとの口端にも上らなくなったばかりか、記憶からさえ消えてしまおうとしている。

[文責 高田]

【話者】

川島重太郎	浦河町堺町西	大正三年生まれ
館 勝五郎	浦河町堺町西	明治二十九年生まれ
塚田 正吉	浦河町大通二丁目	明治四十年生まれ
阿部 金蔵	浦河町大通五丁目	明治四十一年生まれ
高島末治郎	浦河町浜町	明治四十年生まれ

【参考】

浦河港大観	昭和九年	浦河漁業組合
西 忠義翁徳行録	昭和八年	日高実業協会
産業調査報告書十六巻	大正三年	北海道庁